
4 . オペラ

フランシス・ローレライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4・オペラ

【Nコード】

N1220T

【作者名】

フランスス・ローレライ

【あらすじ】

萩谷にハツパをかけられ、イサムはマミをオペラに誘う。

イサムはウィーンに来てから、札幌稲穂小学校の同級生、萩谷オサムと再会していた。あれから実に二十年以上経ち、萩谷は腕スキのジャーナリストになっていたが、やはり独身で、二人は気のおけない仲間に戻ったのだ。「イサム、オサムの漫才コンビ」の復活である。

ある晩、イサムはアパートを訪ねてきた萩谷と、土地の白ワインを酌み交わしながら放談していた。

「イサム、実は、ちょっと面白い論文を持ってきたんだ。この町でフロイトの始めた、精神分析の延長で……」と言いながら、萩谷はカバンから何やらクシャクシャツとした資料を取り出し、声に出して読み始めた。

「悪夢について。

例えば夢に幽霊が出てくる場合、二通りの可能性がある。

一つは、本物の幽霊が出るケース。これは幽霊を信じる人でないと、論じる資格がないので、その道の専門家にお譲りしよう。

二つ目の可能性は、にせ幽霊。

この場合は、潜在意識のイタズラに過ぎない。

この世の常識だが、人間にはそれぞれ、本来の意識と潜在意識の双方が備わっている。

本来の意識を「自我」と呼び、潜在意識を「エス」と呼ぶ。

自我は、前頭葉に宿る。そして人間的な思考と共に、筋肉の運動を司る。

エスは、視床下部に宿る。筋肉を動かすことはできないが、自律神経系やリビドー系とつながり、体調を整備する。

昼間、筋肉や体を動かしながら生活する際は、自我が司令塔。

エスは、自我の気まぐれに合わせて体調整備せざるを得ない。

ところが夜になり自我が眠ると、エスが眠らぬまま、夜警の任

に当たるのである。

しかるに睡眠は通常、外気や外敵から守られた屋内（寝室）で取るので、環境は安定的。

そこでエスはどうしても、暇を持てあましがちになるので、普段、自我に抑圧されている鬱屈感を晴らすため、まるで映画監督のように夢を演出し、自己実現を図るのだ。

セクシーな夢もあるだろうが、演出が過ぎると悪夢となり、幽霊が登場したりする。

そして睡眠中の自我は、その夢を映画の様に鑑賞しながら、本物の幽霊と錯覚し、恐怖におののく……」

ここまで来て萩谷は顔を上げ、「この話、どう思う？」と尋ねた。

イサムは少し不愉快そうに、

「エスが、北野武とかスピルバーグの真似事？ 奇抜だね。大体、夢では争ったり、逃げたりするじゃない？ これは自分でもロールプレイする証拠で、今では説明不十分」と、反論した。

「なるほど。確か夢は、瞳が忙しく動く、レム睡眠時に見るんだよ、起きる直前に……だから自我は、ドリームワールドで、大活躍……」とつぶやきながら、萩谷が続きを読み始める。

「しかるに、起きている時にも、エスの強く支配する人たちがいる。これが、女性的な人間。ピカソが描くような、キュービックで二重人格的な女性は、その典型だ。

彼らは総じて、自意識過剰かつ気まぐれと言えよう。何故かと言つと、自我とエスが、同じように強く外界に反応し、作用するから。

太郎のそばに、このような気質の花子がいたとする。

太郎を意識するのは、自我こと花子A、そしてエスこと花子B。言ってみれば、花子は、太郎を二重に意識するのである。

また同時併行的に、花子Aは花子Bを意識し、花子Bは花子Aを意識する。すると花子の行動や言動は、AとBが相まみえるため、

総じて奇妙奇天烈、自意識過剰かつ、気まぐれとなる……」

「男性的な女も、いるだろうが！ それより萩谷、この間はミス平原と、とっても良い雰囲気だったね！」

「えっ？ とんでもない！ 彼女って、つきあっている奴がいるらしいし……」と、萩谷が顔を赤らめながら答える。

「いいなあ。ダンスがうまいと、便利なんだろう？」

「いやいや、お前こそ……この間のバルの帰り、せっかくマミちゃんを送っていったのに……噂では……」と言いながら、萩谷は突然ニヤリとし、ついに、

「ウワツハツハツ！」と、声を立てて笑いこける。

イサムは、無然としている。

「だらしのないなあ、お前……朝帰りになりながら！」

「翌日、出勤で……」と、イサムが弁解を試みる。

「今度は彼女をオペラに誘って、本当に王手！ な？ 正しく、真面目にマミAとBを攻めるよな！」と、萩谷はおるのであった。

萩谷が帰った後、イサムが国立オペラ座のウェブサイトを見ると、そこにアルテドナウ・アンサンブルで序曲を練習中の『フィガロの結婚』の公演が入っていた。

オペラは高いので、津軽マミのような学生は、立ち見が多かった。そこでイサムは、くつろげるような席を手配し、彼女を招待するメールを打ち始める。

「津軽マミさん、しばらく会わないけれど、お元気ですか。」

国立オペラ座の切符が手に入りました。

再来週の火曜日の『フィガロの結婚』だけど、一緒に見にいきませんか。

オペラの幕間に、女神の彫像が並ぶテラスでシャンパンを飲もうよ。

きつと、お姫様のような気分になれるから……。

「国谷イサム」

彼女から返事が来たのは次の日、それも夜中の12時頃だった。

「国谷さんへ、

フィガ口の結婚、喜んで見に行きます。どうぞ宜しく

津軽マミ」

「イヤーツホーツ！ やったぞ！」と、狂喜乱舞するイサムだった。

約束の当日は雪で、夜になっても降り続いていた。

国立オペラ座は、シュテファン寺院の方からケルントナー通りを下り、環状道路「リンクシュトラッセ」に出た右手の、クラシックな建物である。東京なら、銀座通りの先の歌舞伎座、と言ったところだろうか。

イサムは7時前に到着したので、オペラ座の建物に入り、プロگرامを買うと、入り口の玄関先に戻った。

暫らくすると、マミがやってきた。

彼女は、この間一緒に買った、白と茶色の毛皮の帽子を被っている。いつもより背が高く見えるのは、ヒールの高い靴のせいだろうか。

「やあ、お久しぶり！」とイサムは、手を振りながら彼女に呼びかけた。

「こんばんは！」と彼女は、少しびっくりした様子で答える。いつものグレーのコートが、粉雪で白くなっている。

「雪の晩なのに、申し訳なかったね」

「いいえ。そんなこと、ないわ」

「その帽子、なかなか良いじゃない」

「そうなの、お陰様で！」

彼は、入り口のところで彼女にコートや靴の雪を落とさせて、建物の中に連れて入る。

そして二人で、豪華な大理石の階段をのぼっていく。先に行く彼女が足を踏み出すたびに、長い黒髪がゆれる。

階段をのぼる時は女性が先、下りる時は男性が先だった。「か弱き

女性」を予期せぬ転倒から守るための習慣だろう。

クロークの前で外套を脱ぐとマミは、例の深緑で襟の黒いパンツ・スーツ。今夜はそれに、真珠のイヤリングをつけている。そして何やら、花のフレグランス。

イサムは、ダーク・スーツに保守的な感じのタイ。

そこで二人のコートを預ける。

案内嬢に切符を見せると、彼女は一階の真ん中、舞台に向かって少し右手の方向を示してくれた。

劇場の中に入ると、既にたくさんのお客が着席していた。

二人の目指す列の端っこまで来ると、イサムは気を配りながら申し訳なさそうに、彼女を誘導する。

「インシューリグング」

「すみません」

どうしても、手前の観客を立たせてしまうのだ。

舞台のよく見える席だった。

「今夜は、よく来てくれたね」と言っつて、イサムが彼女にプログラムを渡した。

「あ、どうも有り難う」と言いながら、彼女が嬉しそうに受け取る。彼女のフレグランスが、どうも気になる。

「元気にしていた？」と言っつて、彼女の顔色をうかがう。

「うん。貴方は？」

「そうね、元気。でも、仕事が忙しくてね……」

「私も」

「知っていると思うけど、舞台はスペインのセビリアで、アルマヴィーヴァ 伯爵のお屋敷なんだ」と、イサムがささやく。あらかじめ、調べてあるのだ。

「そう、そう」と、彼女がうなずく。

彼がせりふ翻訳用の小さなスクリーンを見ていると、高いヒールで目立つ、彼女の伸びやかな足を意識してしまう。

「アルマヴィーヴァ伯爵がセクハラオヤジで、スザンナに気がある

のよね」と彼女がつぶやく。

その横顔が、素敵だった。

「そう言えば来年秋には、ここにマエストロ・オザワが来るんだよね」

「そう。すごいね、その話。音楽監督だっけ」と、彼女が答えた。

そこで「フィガロの結婚」序曲がダイナミックに始まった。紫色の、とても重そうな緞帳があがっていく。

アルテドナウ・アンサンブルで、練習しているやつだ。

舞台装置は18世紀調で、古典趣味。

鏡に見入っているスザンナをよそに、フィガロが何やら床の寸法を測っている。

「フィガロが、スザンナと結婚してから住む部屋にベッドを入れるために、部屋の寸法を測っているんだ」と、イサムがささやく。

「確か二人とも、伯爵の使用人で……」

「スザンナは、伯爵夫人の召使だよ……」

舞台装置も派手な衣装も大変見栄えがするし、オーケストラの小粋な伴奏を伴うそれぞれのアリアは、非常に華やかでインパクトがある。

それでも役者が歌と共に次々と出入りし、椅子の陰に隠れたり再び現れたりするので、イサムもさすがに舞台への関心が薄れ、ママの表情や息づかいばかりが気になりはじめた。

そこで彼の集中力をようやく取り戻してくれたのは、第二幕目でケルビーノの歌うアリア「恋を知る君は」だった。

「VOI, CHE SAPPETE…… CHE COSA È AMOR?»

ケルビーノはありとあらゆる女性に惚れてしまう、伯爵夫人仕えのとても若い小姓だ。

「私の愚かな恋を責めるけど、皆さんも恋の何たるか、御存知でしょう?」と訴えているらしい。

このアリアは、イサムのお気に入りだった。
マミも感動するらしく、隣で涙を流しているような気がするが、彼の勘違いかも知れなかった。

幕間の休憩時間になり、観客が次々と席を離れていく。

「少し、テラスに出てみない？」と、イサムが彼女に声をかける。

「ええ、そうね」

そこで二人一緒に席を立つ。

かの有名なテラスは、広々とした、天井の高いバルコニーになっていて、そこかしこに楽聖たちの胸像が配されている。

二人がそこでグラスを傾けたのは、イサムの計画通り、シャンパンだった。

雪は既にやんでいる。

おぼろげなる光が薄い雲のすき間から射しこみ、バルコニーの広い手摺り部分に、等間隔で立つ女神たちを照らし出していた。

「ああ、ここまで来ると、少し解放されるね」とイサムが言う。

「雪もやんだし、とても素敵……」とつぶやきながら、彼女が目を輝かせる。

二人の息が白く見える。あちらこちらで、カップルが楽しそうに歓談していた。

「それにしてもオペラって、筋が分かりにくいよね、何回見ても……」と、彼がコメント。

「そう。これから、スザンナに迫ろうとする伯爵を欺くために、女性が共謀するの。スザンナと伯爵夫人が、洋服だけ入れ替わって」「え？」と、彼が分からないふりをした。

「フィガロとスザンナの結婚式の夜、伯爵は、秘密の逢い引きに誘われるけど、スザンナの恰好をした伯爵夫人と密会するの」

「なるほど。こみ入ってるんだ」

「そう言えば『セビリアの理髪師』、見たことある？」と、彼女が尋ねてきた。

「いいや、あんまり……ロツシーニだったよね？」

「そう。話が続いているの。音楽も少し、モーツァルトに似ているし。『セビアの理髪師』では、アルマヴィーヴァ伯爵がまだ独身で、ロシーナを追いかけているの」

「それで、ついに結婚？」と、彼が合いの手を入れる。

「そうなの。その時、理髪師のフィガロが伯爵を助けてあげるの。だから論理的には、今夜の伯爵夫人はロシーナだし、フィガロは伯爵の恩人なの……」と、彼女がまくしたてる。

「そうしたら、この伯爵、どうしようもない奴だね……そう言えば、津軽さんにヴァイオリン続けるお金なかったら、この手の伯爵と、どう付き合う？」

「何が言いたいの？ ヴァイオリン続けるために、伯爵の誘惑に乗るかどうか？」と言って、彼女がわざとらしく、怪訝そうな表情を浮かべる。

「ワツハツハ！ それそれ」と、彼が嬉しそうに反応する。

「随分な話ね！ 不純では、ないのかなあ？」

「ごめん、ごめん。そうだよ、間抜けな話！」と答える イサムは、どういいうわけか、嬉しそう。

暫くすると、次の幕の始まりを気にしながら、カップルが次々と本館に戻って行った。

寒くなってきたイサムたちも、席に戻ることにする。

そして第3幕。

フィガロが、借金返済の代わりに結婚を迫られている家政婦長のマルチエリーナがなんと、実の母親だと発覚するシーンで、イサムの忍耐も峠を越え、ついつい、欠伸。

そこで彼女が、肘で小突いてきた。

「あ、いけない……」

しばらくすると場面が展開し、スザンナが伯爵夫人と共謀して、アルマヴィーヴァ伯爵をその晩、庭に誘い出す手紙を書くシーンと

なった。

それから、フィガロとスザンナの結婚式。

そこでスザンナが、伯爵に手紙を渡してしまう。

そして長い演目も、ついに第4幕目。

筋立ては、ママの説明通りだった。

その晩、庭で。

伯爵夫人とスザンナが洋服をすり替えたおかげで、スザンナとの逢瀬のつもり伯爵は、だまされて奥様に求愛してしまう。結局、スザンナはフィガロとめでたく結ばれ、ハッピーエンドに……。

最後には、大合唱で幕が下りた。

しばらくすると、キャストが一人ずつ出てきて、挨拶する。

その度に、拍手喝采！

最後に、スザンナ役が指揮者を指し示すと、管弦楽団の連中もそこで立ちあがり、やんや、やんやの拍手をした。

イサムがママを見やると、彼女は少しほっとした面持ちで、目を合わせてきた。

開演から、実に3時間以上経っていた。

みんな、解放感にひたりながら、がやがやと席を立ち、劇場の外に移動しはじめる。

外に出ると、雪だらけの別世界だった。

「うわあ、寒い！」

二人はすばやくタクシーを見つけると、雪の道を駆け寄り、うまく乗ってしまった。

そしてタクシーの中で、お互いの手を固く握り締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1220t/>

4．オペラ

2011年10月4日14時40分発行